

香港日本人学校における副校長の仕事

前香港日本人学校小学部タイボ校 副校長

大阪府富田林市立彼方小学校 教頭 石田 安志

キーワード：国際理解、国際人の育成、日本の教育、香港の教育、バカロレア認定校

1. はじめに



二度目の派遣である。前回は、アメリカ合衆国【ニューヨーク日本人学校】、今回は副校長としての赴任なので守備範囲が広くなり、どこに重点をおいて勤務するかを考えた。特に、校長は学校のお父さん役だと考えると副校長は、お母さんということになる。児童の人数が減少傾向ということもあり、児童数の確保も重要な任務である。学校内におけるお母さんの役割についてまとめてみたのでこの場を借りて紹介する。

2. 香港日本人学校の概要

香港は、中華人民共和国の特別行政区として、1997年英国より返還され、西洋と東洋の文化が混ざった独特の地域である。金融を中心とした商業が盛んで、税制の緩和も手伝ってにぎわいを見せている。また、日本からは中国の入り口として巨大なマーケットを狙う拠点としてビジネスマンの出入りも多く、約2万人の日本人が生活している。その中で、小学校2校と接続の日本人学校中学部が1校ある。合計1000人ほどの学校である。タイボ校は、インターナショナルスクールとして、日本語によるクラスと、国際学級という英語を母語とするクラス（インターナショナルバカロレア認定校 本部 スイス）が一つの校舎に入っているため、約30カ国の子どもたちが同じキャンパスにいて、交流も行っている。近年、日本でもインターナショナルバカロレア認定の学校が増えてきているので、香港国内でも注目されている。

3. 学校の営業部長

副校長の仕事として、学校選びに回る香港赴任が決まった方々や、香港永住の日本にルーツを持つ方とお話しする機会が多い。その中で、保護者としては「これからは英語の時代」と考えている方が大半で、「それならば、いっそ、インターといわれる英語主体の学校へ」という方も多い。しかしながら、大半の家庭が香港への赴任は3年から5年なので、日本に帰った時に学習が遅れるのも心配されている。英語の習得には時期があるといわれている。脳の発達の時期によって、ネイティブの発音ができるようになったり、難しくなったりするという科学的根拠もある。しかし、日本人の子どもで、母語を身につける前に赴任先などで第2言語が話せるようになったといっても、帰国して日本の環境でその言語力を維持、向上させるのは至難の業である。これも、科学的根拠もあるし、前回の赴任でも身をもって経験した事実でもある。さて、香港に赴任した場合、日本人学校に入れるべきか？はたまた、インター校に入れるべきか？

私は、企業の方が学校見学に来た時に「赴任の期間」について何う。香港で高校まで卒業しようとしているなら

ば、香港には日本人学校の高等部がないために、インター校に進学するか、日本で一人暮らし【寮に入る】などしなければならない。反対に、2、3年で日本に戻るのであれば、迷わず「新聞を一人で読めるようになるまでは、母語の教育を受けさせるために日本人学校に入学させなさい。」と答えるだろう。「アメリカには、たくさん英語を話せる人がいます【当然】。ではその方々は皆、国際人として世界で活躍していますか？」聞くと、答えは「否」。日の丸を背中に香港で活躍している人、してきた人は、別に流暢な英語を話すわけではない。英語が流暢なだけでは、何も伝わらない。何かを伝えたい。という気持ちがあれば、英語は高校からでも大学からでも遅くはない。日本の良い製品に誇りを持ち、世界中の人に伝えたいという気持ちが強かったから、日本は世界約200カ国の中で、1、2を競うような経済を手に入れた。これはこれからも変わらない。それならば小学校一年生から、ペンの持ち方、手の上げ方、人と話をするときのルール、日本の礼儀作法、運動会の協力などを日本型で学習させ、母語を正しく身につけ、伝えたいことがある人に育てることが最優先課題になる。

4. チームで対応する組織作り

次に、副校長の大切な仕事として、担任外の先生と事務局を組織して、PTAや外部の組織、団体との交渉や窓口の仕事を引き受けること。担任の先生方は、朝の職員朝礼がおわるとお弁当と水筒を持って教室に向かい、ずっと子どもの前に居られるように、アウトサイドワークはすべて引き受けるつもりで活動した。「担任は、いつも子どもの前に居られるように。」という原則を持っていると、たとえば、PTAから、担任の先生にしてもらいたい要求も、厳選することができるし、各種団体から資料の配布要請がきても厳選してお断りすることもできる。担任がすべき仕事と、担任外がすべき仕事の守備範囲を明確にしておくことは、後に不公平感を生み出しにくい体質を育てる。事務作業だけでなく、交渉ごと引き受けるし、困っている子（特別支援が必要な児童や、何らかの背景があり、行動が不安定になっている児童など）のサポートチームも担任外で結成している。このことにより、担任が一人で抱え込むことなく、チームで子どもたちを見ていくことができる。必要に応じて、放課後に担任も入ってケース会議に発展することもある。その後、WISKなどの発達検査に発展して児童理解がすすむこともある。このシステムを教職員が理解、共有することで、担任の精神的な支援になるばかりでなく、課題をもった一人一人の子どもたちへ教師集団からの声かけも手厚くなる。

5. 世界レベルのPTA

日本人学校の保護者は、特に教育に対する興味関心が高く、PTA実行委員会を中心とした組織を活性化させ、学校との良好な関係を築く必要があり、副校長はその要となる。学校の様子を隠すことなく知っていただき、専業主婦が多い駐在家庭のボランティアの力を活用することだ。

本校には、読み聞かせボランティア30名、通訳ボランティア10名が以前から活躍していたが、デコレーションボランティア25名を加えて、学校へ来る機会を増やすことに成功した。さらに、先ほども触れたが、ボランティアの活動が、担任の行う活動や授業に、一切負担をかけない。という原則を提示し、たとえば、読み聞かせボランティアを学級に入りこんでおこなっても、感想文や感謝の手紙などは一切不要とした。写真の撮影も担任に事前に許可が無くてはできないことにした。

毎回のボランティアの後で反省会を持ち、ルールを守って活動されたので、担任からの苦情もなく、教育現場に有効な非常にレベルの高い活動とPTAが自負できるものになった。

